

言いさし文「Vなきゃ」に後接する「ダ」の機能

國 澤 里 美

The Function of “da” When Following the Suspended Sentence “V-nakya”

Satomi KUNISAWA

1. はじめに

会話の相手が「私、頑張らなきゃ」と言った場合、その応答として「頑張って」や「一緒に頑張ろう」のように言うことができる。「頑張らなきゃ」という表現は統語的には不完全文であるが、これが「頑張らなければならぬ」ということを意味し、話し手¹が決意を述べていると解釈することは難しくないだろう。この発話に続きがあると文の後半部を待つことはないと思われる。従来「Vなきゃ」は「Vなきゃならない」²の省略形であるためか、同義として扱われてきた。しかし、話し手が自分の決意を表明する場面において(1a)のように「全部食べなきゃ!」と言えるのに対し、(1b)のように「全部食べなきゃならない!」とは言えない。普通体を丁寧体にしても(1a')が自然な表現であるのに対し(1b')は非文になることから、文体に関わらない違いであると言えるだろう。

(1) よし。今から10分で目の前の料理、全部 {a. 食べなきゃ! / b. *食べなきゃならない!}

(1') よし。今から10分で目の前の料理、全部 {a. 食べなければ! / b. *食べなければなりません!}

このように「Vなきゃ」と「Vなきゃならない」には単に省略形か否かだけでない違いがあると思われる。

また、(2a) (3a) は言いさし文(白川 2009など)と呼ばれるが、近年これに「ダ」を付加した(2b) (3b) のような形に触れる機会が増えている。

(2) 全部食べなきゃ {a. φ / b. だ}。

(3) 私も頑張らなきゃ {a. φ / b. だ}。

動詞述語文で使われないはずの「ダ」が使われるのはなぜだろう。また、このような「ダ」にはどのような機能があるだろう。本稿は、(2b) (3b) のような新しい使われ方には聞き手への配慮

1 本稿における「話し手」とは、発話者だけでなく書き手を含む情報発信者を指し、「聞き手」とは読み手を含む情報受信者を指す。

2 本稿では省略形「Vなきゃ」に対立するものとして「Vなきゃならない」という形式に代表させる。これには「Vなきゃなんない」「Vなきゃいけない」を含む。

が関わっていると考える。このような例の考察はコミュニケーションにおける配慮のあり方を考える手がかりとなるだろう。本稿では次の2点を明らかにするために、「Vなきゃだ」について語用論の観点から考察する。

- I) 「Vなきゃ」と「Vなきゃならない」に見られる使用場面の違いは何に起因するか。
- II) 「Vなきゃ」に後接する「ダ」の機能は何か。

2. 先行研究および本稿の立場

2.1 言いさし文

言いさし文の体系的な研究に白川 (2009) がある。言いさし文とは、(4) (5) のように従属節のみで終結し、統語的には不完全文であるにも関わらず、内容的には言い切り文と同等の完結性を有しているものである。

- (4) 舞 「ダンス歴は？」
杉山「まったくの初めてですけど」(白川 2009 : 1 : 例 1)
- (5) 良介「ややこしいやっちゃなあ」
と、出ていく。
良介「ちょっと、煙草買うてくるから」(同 : 例 2)

白川 (2009) において取り上げられているのは、ケド節、カラ節、タラ節・レバ節、シ節、テ形節による言いさし文である。一方、「なければ」「ないと」のような複合的な接続形式については残された課題となっている。

2.2 「Vなきゃ」

2.2.1 縮約形

川瀬 (1992) は縮約形を音の変化、融合・脱落の観点から7種の類型にまとめ、原形式から縮約形の変換例として「(し) なければ」→「(し) なきゃ (あ)」、「何もしなければいいのに」→「何もしなきゃ (あ) いいのに」等を示している。また、『日本語教育事典』(2012) の「縮約/融合」の項目にも「行かなければ→行かなきゃ ([kereba] → [k'a] : [reb] の脱落、[ea] の融合)」とある。以上、「Vなきゃ」が「Vなければ」の縮約形であることを確認した。

2.2.2 評価のモダリティ形式

日本語記述文法研究会 (2003 : 91-131) は、「なければいけない/なければならぬ」を評価のモダリティ形式の1つとして位置づけている。評価のモダリティとは、「話し手が何らかの事態を述べ伝えるときに、その事態に対する話し手の評価的なとらえ方を表すもの」で、「なければ」「なきゃ」は必要を表す形式であるとしている。また、話し言葉では「後半部分の『いけない』『ならない』が省略されることもよくある」と述べている。これ以上の記述は特になされていないが、先に見た (1a) と (1b) のように使用場面に差が見られることから、本稿は2つの形式には構文および機能の違いがあると考えられる。

2.2.3 構文の種類

「Vなければ」は評価のモダリティ形式や条件文の観点からは議論が多くなされてきたが、言いさし文の観点からはそれほど考察が進められてこなかった。言いさし文まで含めて考察したものに藤井（2008）がある。藤井はト構文を次の①～③の3つに分類し、接続助詞は本来2つの節を繋いで複文を作るが、実際の会話データを見てみると常にそのような使われ方がされているわけではないと指摘している。本稿2.1で見た「言いさし」文に相当する③「縮約構文（独立節構文）」³を1つの構文として認めている点は、ト構文の全体像を捉える上で重要である。

①一般的条件接続構文

(6) 難しい技は一年かけて仕込まないと、試合で使えない。

（藤井 2008：例 6.1、下線は引用者による）

②評価的統合構文

(7) 難しい技は一年かけて仕込まないと意味がない。（同：例 6.2 a）

(8) 難しい技は一年かけて仕込まないといけない。（同：例 6.2 b）

③縮約構文（独立節構文）

(9) 難しい技は一年かけて仕込まないと。（同：例 6.3）

藤井は考察対象として「ないと」「なきゃ」「なくちゃ」を取り上げているが、ト構文中心に考察がなされ、「なきゃ」が「ないと」と同列に扱われている。しかし、2.3.2で見る新屋（2015）の新しいデス文には親しみと適度な丁寧さが関わっているという指摘を考えると、「ダ」の考察でも「なきゃ」と「ないと」に見られる文体の違いや丁寧さのレベルをそろえることが望ましい。

このように、従来縮約形と非縮約形は話し言葉と書き言葉というスタイルの違いはあるものの、それ以外は同じものと見なされてきた。これに対し本稿は、3節で示す仮説のように、「Vなきゃ」は「Vなければならぬ」と構文自体が異なり、言いさし文として使われる場合に〈遂行〉の機能を持つと考える。

2.3 「ダ」

2.3.1 文の種類と「ダ」の使用

述語文は、述部の中心をなす品詞の違いに基づいて「動詞述語文」「形容詞・形容動詞述語文」「名詞述語文」「疑似名詞述語文」の4つに分類できる（南 1993など）。「ダ」は「静かだ」のような形容動詞述語文、「雨だ」のような名詞述語文、「ぼくらは12日に神戸から船で出発だ」のような疑似名詞文で使われ、動詞述語文の場合は「今日の天気は晴れたり、曇ったりだ」のV1タリV2タリ構文のような限定的な使用となる。本稿の考察対象である「Vなきゃ」に後接する「ダ」は新しい使われ方であると言えるだろう。

2.3.2 新しいデス文

普通体「ダ」の新しい使われ方に関連する先行研究として、新屋（2015）における丁寧体「デス」の考察を見る。新屋は「間違えてもいいから手元を見ずに打つ練習をするです。」「お盆休みも終わ

3 藤井（2008）の用語であり、本稿における「縮約」とは2.2.1で見た音変化によるものを指す。

り、今日からまた記事再開になりますのでよろしくです！」のように、「デス」が名詞述語文や形容詞述語文以外で用いられる場合について「新しいデス文」と呼び、このような文の性質として「適度な丁寧さ」を指摘している。話し言葉の要素を含む「親しみと適度な丁寧さを表示する文」はブログのような場にふさわしく、広く用いられるようになったのではないかという指摘は大変興味深い。新屋（2015）は、言いさし文については（10）（11）のような例を示し、「丁寧辞としてのこうした機能は言いさし文、挨拶言葉、感動詞などに付加されるデスに共通している」と指摘している。

（10） でも、その前に報酬月額を調べてからでないとです！

（新屋 2015：例14、下線は引用者による）

（11） その間に雑誌を買いに本屋も行かねばーです。（同：例15）

（10）（11）についての具体的な考察はなされていないが、言いさし文と丁寧体「デス」が共起する場合、「親しみと適度な丁寧さ」という説明は可能だろう。しかし、本稿の考察対象である縮約形「Vなきゃ」と普通体「ダ」の丁寧さは同程度であり、(2b) (3b) は「適度な丁寧さ」とは異なる観点からの考察が必要であると考えられる。非縮約形の「Vなければ」も「Vなきゃ」と類似の機能があると考えられるが、本稿では丁寧さのレベルをそろえ、「Vなきゃ」＋「ダ」という形式を考察対象とする。

以上を踏まえ、本稿は「Vなきゃ」に①条件文、②評価文、③言いさし文の3つの構文を認め、「Vなきゃだ」のように「ダ」が後接する場合を考察する。⁴

3. 仮説の提示

研究課題Ⅰ〈「Vなきゃ」と「Vなきゃならない」に見られる使用場面の違いは何に起因するか〉についての仮説を3.1で、研究課題Ⅱ〈「Vなきゃ」に後接する「ダ」の機能は何か〉についての仮説を3.2で示す。

3.1 「Vなきゃ」と「Vなきゃならない」

次の(12a) (12b)のように「Vなきゃ」「Vなきゃならない」は必要性を述べる場合に使われる。この2つの形式は同義として扱われてきたが、(13a)が自然な文であるのに対し(13b)は非文となることから、同一であるとは言えない。(12)と(13)の違いは発話時における瞬間的な表明であるか否かである。(12)が瞬間的な表明であるとは言えないのに対し、(13)は眼前の状況について話し手がその場で決意表明をしている。この場合、(13a)のように「Vなきゃ」は使えるが、(13b)のように「Vなきゃならない」は使えない。

(12) 来年、マラソン大会に出るために毎朝 {a. 走らなきゃ／b. 走らなきゃならない}。

(13) よし。今から10分で目の前の料理、全部 {a. 食べなきゃ！／b.* 食べなきゃならない！}

4 「Vなきゃ」の類似形式に「Vなくちゃ」があるが、条件文におけるト、タラ、バ等の使い分けについては議論が多くなされてきた。非縮約形の「なければ」と「なくては」の違いが、縮約形の「なきゃ」と「なくちゃ」に影響している可能性が考えられるため、同列に扱ってよいか慎重に考えたい。本稿では「Vなきゃ」を対象を絞って考察する。

(=例1)

本稿は(13a)の「Vなきゃ」と(13b)の「Vなきゃならない」は形式だけでなく、構文や機能も異なると考える。まず、構文について述べる。「Vなきゃ」「Vなきゃならない」は(12)のように評価を下すための時間がある場面や、恒常的な内容について述べる場面では評価文として使われる。この場合の「Vなきゃ」は、評価のモダリティ形式「なければならない」の省略形であると言えるだろう。一方、(13a)のような瞬間的な発話では「Vなきゃ」が言いさし文として使われる。(13b)が非文となることから「Vなきゃ」に限定した使われ方であると言える。このように「Vなきゃ」「Vなきゃならない」は、(12)のような恒常性がある場面では評価文として用いられるが、(13)のような瞬間的な発話場面では「Vなきゃ」しか使えず、言いさし文として用いられる。

次に、機能について述べる。(12)のように評価文として使われる場合は必要性のみが表されるのに対し、(13a)のように発話時現在について述べる場合は遂行性を持つ。ただしその機能は動作主によって異なり、動作主が話し手の場合は決意表明、聞き手の場合は提言を表す。また、この遂行性には強弱があると思われる。これに対し、(13b)のような言いさし文でないものは非文となる。

以上をまとめると次のようになる。

〈仮説I〉

「Vなきゃ」と「Vなきゃならない」はいずれも必要性を表す形式であるが、構文および機能が異なる場合がある。構文の観点から述べると、評価文としては「Vなきゃ」「Vなきゃならない」がいずれも使えるのに対し、言いさし文としては「Vなきゃ」のみが使える。機能の観点から述べると、「Vなきゃ」が遂行性を持つのに対し、「Vなきゃならない」は持たない。この違いが両形式の使用場面の違いに表れる。

「Vなきゃ」が遂行性を持つという仮説を前提に、3.2で「Vなきゃ」に「ダ」が後接する場合について考える。

3.2 「Vなきゃφ」と「Vなきゃだ」

本稿は「早く起きなきゃだ。」のように「ダ」が言いさし文に後接する場合と、「早く起きなきゃだし。」のように「ダ」が言いさし文の一部(シ節など)となる場合を区別し、前者を考察対象とする。

3.1で見た「Vなきゃφ」は遂行性を伴う表現であるという仮説に従うと、次の(14a)において話し手が料理を食べる場合は決意表明、聞き手が食べる場合は提言という働きかけの機能を持つ。動作主によってその機能は異なるものの、いずれも遂行性がある。しかし、(14b)のように「ダ」が後接する場合、遂行性は弱まる。これは「ダ」が、話し手が事態を認識していることを表す⁵ためであると考えられる。発話時現在の決意や提言を〈表明〉することと、事態について〈認識〉を述べることは性質が異なる。(14b)のように「ダ」が後接すると話し手の〈認識〉が前面に表れる。このため、〈表明〉場面で見られる遂行の機能が弱まる。「ダ」を付加することで(14c)のような遂行性のない評価文に近づくと考えられる。換言すると(14b)のような「Vなきゃだ」

5 「ダ」を巡る議論は様々だが、本稿は寺村(1984)の「確言」の概念を援用し、この立場を取る。

という表現は、(14a) のような言いさし文の構文と、(14c) に近い遂行性の弱さを持つものであり、両者の間に位置づけられる。

- (14) a. 全部、食べなきゃφ。〈言いさし文〉〈遂行性：有〉
 b. 全部、食べなきゃだ。
 c. 全部、食べなきゃならない。〈評価文〉〈遂行性：無〉

(14b) において話し手は、「Vなきゃφ。」と言いつける場面であえて「ダ」を用いている。この理由について語用論の観点から説明すると、発話時現在の瞬間的な表明を避けて遂行性を弱めることで、自分を前面に押し出すことを回避していると言えるだろう。これは配慮の表し方の1つであると解釈できる。

以上をまとめると次のようになる。

〈仮説Ⅱ〉

言いさし文「Vなきゃ」に後接する「ダ」は、遂行性を弱める機能を持つ。遂行性のある表現を避けることで聞き手への配慮を表している。

この仮説を検証するために、4節で言いさし文「Vなきゃ」に後接する「ダ」の使われ方を見る。

4. 言いさし文「Vなきゃ」に後接する「ダ」

4.1 応答に見られる違い

「φ」と「ダ」は、これらを用いた発話の応答に違いが見られる。(15) (16) は話し手Aが宿題する必要性を思い出した場面であるが、(15) 「やらなきゃφ」のように述べると実行必要性の言及だけでなく、話し手の宣言や決意表明として解釈される。ゆえにBから「頑張って」という激励の応答が得られる。これに対し、(16) 「やらなきゃだ」のように述べると実行必要性の言及はされるものの宣言や決意表明という解釈はしにくく、話し手が認識した事態として表現される。ゆえに応答も、「そうなんだ」のように話し手の置かれている状況を知ったという内容にとどまる。

- (15) A：忘れてた。宿題やらなきゃφ。〔動作主：話し手〕〈遂行性：有〉
 B：頑張って。
 (16) A：忘れてた。宿題やらなきゃだ。
 B：そうなんだ。

(15) (16) における動作主が話し手A自身であるのに対し、次の(17) (18) において「起きる」のはBである。話し手Aが声がけした結果Bが起床する、という働きかけ（遂行性）があることが明らかな場面では、「Vなきゃ」と「Vなきゃだ」に対する応答の違いはより明確に表れる。

- (17) A：ほら、いつまで寝てるの？早く起きなきゃφ。〔動作主：聞き手〕〈遂行性：有〉
 B：うーん…あと5分だけ…。
 (18) A：?ほら、いつまで寝てるの？早く起きなきゃだ。
 B：?そうだね。

(17)「起きなきゃφ」のように述べると起床の必要性に言及するだけでなく、Bを起こすという働きかけが見られる。これに対し、(18)「起きなきゃだ」のような発話に働きかけは見られない。(18)におけるAの発話そのものが不自然であるが、もしAにこう言われたとするとBは「そうだね」と他人事のような応答になるのではないだろうか。応答については4.3の考察においても取り上げる。

以下で「Vなきゃだ」の用例を見ていくが、動作主によって3つに分類する。4.2では動作主が話し手の場合、4.3では聞き手の場合、4.4では第三者の場合について見る。

4.2 動作主が話し手である場合

(19) (20)において「Vなきゃφ」と言えるにも関わらず、あえて「ダ」を付加して「Vなきゃだ」と述べている。動作主はいずれも話し手自身であるが、(19)が話し手自身の内容であるのに対し、(20)は相談者への助言が中心的な内容である。

(19) 【ブログで】

食いすぎた。でも、歩きまくった。プラマイ0ではないかもだけど……でもまあ動いただけでした。そう思いたい。(中略)バナナも1本分食っちゃった……。まあアイス食うよりましたと思わなきゃだ。(BCCWJ Yahoo! ブログ OY14_19915)⁶

(20) 【電子掲示板で：ママ友との関係性についての悩み相談に対して】

うちの子は、〇〇はできるけど、これができないんだよね～～、どうやって教えたの～～？なんて会話で、当たりさわりの無いようにね^^；がんばってね！……ああ、私もがんばらなきゃだ^^；；(BCCWJ Yahoo! 知恵袋 OC10_03042)

(19)において話し手は自分の行動を振り返りながら出来事を連続的に述べている。遂行性のある「Vなきゃφ」を用いてブログ執筆時における意志を表明することもできるが、「ダ」を付加することで話し手の事態認識を表面化させている。瞬間的で現場的と言える表明(遂行性)を弱める機能は、現場から一定の距離を保てるブログの性質とも合致する。

(20)は悩み相談への助言が話題の中心である。コメントの大部分が相手に向けられた助言で、働きかけがあるのに対し、最後の「私もがんばらなきゃだ」という一文には相手への働きかけはない。この文で自分自身に焦点を当てることによって、相手に向けた助言だけでコメントを終えることを避け、自分にも悩みや課題があることを伝えることによって対等な人間関係であることを示そうとしていると考えられる。もし(20)において「ダ」を用いずに「私もがんばらなきゃφ」と述べると自分の決意(遂行性)が前面に出ることになり、相手の悩みに応えるという相談サイトで望まれる姿勢とは逆の、場面にそぐわない表現となるだろう。

このように、(19) (20)における「Vなきゃだ」は「Vなきゃφ」に比べて遂行性が弱い。話し手自身について述べる場合に「ダ」が付加される理由は、(19)のような独話的な場面か(20)のような対話的要素がある場面かによって異なる。前者は媒体に適した表現を選ぶなど、話し手の中にその理由があるのに対し、後者は自分の決意を前面に出しすぎないという対人コミュニケーション上の配慮が関わる。4.3でより対話的な用例を見る。

6 現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCWJ)の用例である。

4.3 動作主が聞き手である場合

(19) (20) における動作主が話し手自身であるのに対し、次の (21) の動作主は聞き手である。

(21) 【飲食店の口コミサイトで】

〈タイトル〉 まずは人数集めなきゃだね

〈本文〉 ここは学生時代よく仲間で行きました。座敷でみんなでワイワイガヤガヤ楽しむ居酒屋みたいなところですよ。込んでるので夜は予約必須です。(中略) ここは全体的に量が多いので4、5人で行かないといろいろ食べることもできないです。行くならず人数集めを！

(<https://tabelog.com/tokyo/A1304/A130404/13000016/dtlrvwlst/B111932611/>) 2021.09.19

①遂行性と配慮、②応答という2つの観点から述べる。まず1点目である。(21)は飲食店の口コミサイトの投稿だが、話し手(投稿者)はこの店を複数回利用したことがある経験から、この店について情報を持っていないであろう聞き手(読者)を想定して助言している。料理の量が多いことを理由に「行くならず人数集めを！」と本文中に明記していることから、投稿者が人数集めの必要性に確信を持っていることが読み取れる。しかし、タイトルにはあえて「ダ」を付加した「まずは人数集めなきゃだね」という表現を用いている。もし「ダ」を用いずに「まずは人数集めなきゃね」と表すと遂行性を伴う表現となり、まだこの店に行くに決めたわけではない読者にとって押しつけや強制の意味合いが強まり、必要以上の助言をされたと感じ取られかねない。不特定多数の読者がいる口コミサイトにおいて、自分の助言が不快に思われないように、相手の領域に踏み込みすぎないように配慮していると考えられる。このため、読者に注目されやすいタイトルには「ダ」を付加した表現を用い、本文中にも伝達上必要な情報として再度示している。

次に2点目について述べる。4.1で見た「応答」の観点から次のように言える。「集めなきゃね」という表現は、話し手が自分の認識した必要性を相手に伝える場合に使われるが、助言や指示の機能を持ち、相手に働きかける。ゆえに、これに対する応答として想定されるのは、「はい、今から集めます／できるかどうか分かりませんが、やってみます／すみません、それはちょっと難しいです」のように、自分がどう行動するかである。一方、「ダ」を付加した「集めなきゃだね」という表現は、助言や指示などの働きかけは強くない。ゆえに、これに対する応答として想定されるのは、「そうなんですか／知りませんでした／アドバイスありがとうございます」などである。この場合、自分の行動と直接結びつかないものでも構わない。

このように、(21)のような対話的な場面においては、押しつけがましさを軽減したり、強制することを回避したりするという配慮から、遂行性を弱めた形が用いられることを確認した。

4.4 動作主が第三者である場合

動作主が話し手や聞き手の場合に使われる「Vなきゃだ」は弱いながらも遂行性が存在するのに対し、(22)のように動作主が第三者の場合に使われる「Vなきゃだ」は遂行性を失い、評価文の「Vなきゃならない」に近づく。

(22) 今の世の中、リスクのないものなんてないと思うんだけど……それじゃ商売にならないんだろうね。だけど、現在進行形の事故に関しては、絶対に事実をわかりやすく伝えなきゃだよ。よく「国民に無用な不安を与えないように(煽るから)」っていうけど、ちゃんとわかりやすく説明すれば国民も納得してくれる人が大半だと思うんだけどなあ。

(『福島第一原発収束作業日記』河出書房新社)

(22)' (略) だけど、現在進行形の事故に関しては、絶対に事実をわかりやすく伝えなきゃ。

(22) において話し手はわかりやすく伝えることの必要性を述べているが、動作主は話し手が直接働きかけることのできない第三者である。このため遂行性は伴わず、必要性の言及にとどまっている。もし(22')のように「ダ」を伴わない「Vなきゃ」という形にしても働きかけ(遂行性)は感じられない。動作主が第三者の場合に用いられる「Vなきゃ」は言いさし文ではなく、「Vなきゃならない」という評価のモダリティ形式の省略形であり、評価文であると解釈するほうがよいだろう。

以上、言いさし文としての「Vなきゃ」に「ダ」が後接する場合について見た。「Vなきゃφ」が遂行性を持つのにに対し、「Vなきゃだ」はその機能が弱まる。「Vなきゃφ」と言える場面であえて「Vなきゃだ」と述べるのは、瞬間的で現場的な表明や助言を避けることで、押しつけがましさを軽減したり強制的な働きかけを回避したりするためである。このような配慮表現は、Brown & Levinson (1987) が指摘する「FTA (フェイス侵害行為: face-threatening acts)」を回避するストラテジーの一種であると考えられる。遂行性を弱めることが、他者に邪魔されたくないという聞き手のネガティブ・フェイス侵害を回避し、その配慮が他者に好ましく思われたいという話し手のポジティブ・フェイス侵害を回避すると言えるだろう。

5. 言いさし文の一部としての「ダ」

3.2で示したように、本稿は言いさし文に後接する「ダ」と言いさし文の一部となる「ダ」を区別し、前者を対象に考察した。後者についての詳しい考察は稿を改めるが、ここでは4節で見た「ダ」の遂行性を弱める機能が、言いさし文に後接する場合という条件において有効であることを確認する。

(23) は大学生2人がアルバイトについて話している場面であり、早朝起床の必要性を述べている。

(23) 名大会話コーパス⁷ (data072)

01 F086: そう、パン屋さんは朝が早いからね。

02 F046: そうだねー。

03 F086: 8時半とかあるし。

04 F046: あっ、早いねー。

05 F086: そうー、8時半ときは結構つらいよ。6時に起きなきゃだしさ。(あー、そうだねー) うん。歩いて行くし。(そっかそっか) 冬はつらいぞたぶん。

〈笑い〉

7 科学研究費基盤研究(B)(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(平成13年度~15年度 研究代表者 大曾美恵子)の一環として作成された、129会話、合計約100時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。

本稿の考察対象である「Vなきゃだ」は、「Vなきゃφ」が従属せず単独で成立していることを前提とする。一方、(23) 5ターン目の「起きなきゃだし」はシ節の一部であり、統語的に「ダ」の省略は不可能である。本稿では「Vなきゃφ」が遂行性を伴うという仮説をもとに論を展開してきたが、(23)において「Vなきゃφ」が成り立たないことを考えると、両者は性質の異なるタイプであることが分かる。(23)のような例はそもそも遂行性を伴わないため、本稿で論じた「ダ」の遂行性を弱める機能は、言いさし文に後接する「ダ」という条件付きであると言える。以下でそれを確認する。

(23) 5ターン目は2通りの解釈が考えられる。1つは「6時に起きなきゃだしさ」は言いさし文であり、「ダ」はその一部となっている、という解釈である。この発話部分に焦点を当てると、これに対してもう一人が「あー、そうだねー」と応答している。話し手は自分の早朝起床の必要性について、「起きなきゃφ!」のような決意を表明するのではなく、事態を認識したことを述べており、遂行性は伴わない。白川(2009:138)はシ節の機能について、『Pシ』は、文内容Pが成り立つだけでなく、それ以外にも成り立つような文内容Xが併存することを示す」と指摘している。「起きなきゃだしさ」という発話の直後に、「歩いて行くし」という遂行性が見えない発話が続き併存することから、(23)における「Vなきゃだ」は遂行性を伴わないと言えるだろう。

もう1つとして、この文は言いさし文ではなく、主節を伴った完全文であるという解釈がありうる。5ターン目は話し手の発話途中で聞き手のあいづちが見られるが、あいづちを除いて話し手の発話全体に焦点を当てると、「6時に起きなきゃだし、歩いて行くし、冬はつらいぞ」となり、「PシQシX」型の構文(白川2009)となる。このような完全文における列挙用法では遂行性につながらない。

以上、本稿で見えてきた「ダ」が持つ遂行性を弱める機能は、言いさし文に後接するという条件下で働くことを確認した。

6. おわりに

本稿では、まず、従来同一視されてきた「Vなきゃ」と「Vなきゃならない」の違いを確認した。その上で、近年触れる機会が増えている「全部食べなきゃだ」「私も頑張らなきゃだ」のような例を取り上げ、「ダ」が言いさし文「Vなきゃ」に後接して使われる場合として考察した。その結果、1節で示した2つの研究課題について次のことが明らかになった。

- I) 「Vなきゃ」と「Vなきゃならない」はいずれも必要性を表す形式であるが、構文および機能が異なる場合がある。構文の観点から述べると、評価文としては「Vなきゃ」「Vなきゃならない」がいずれも使えるのに対し、言いさし文としては「Vなきゃ」のみが使える。機能の観点から述べると、「Vなきゃ」が遂行性を持つのに対し、「Vなきゃならない」は持たない。この違いが両形式の使用場面の違いに表れる。
- II) 言いさし文「Vなきゃ」に後接する「ダ」は、遂行性を弱める機能を持つ。遂行性のある表現を避けることで聞き手への配慮を表している。

「ダ」を言いさし文「Vなきゃ」に後接させる理由として、自分の意思表示や相手への働きかけなどを直接表すことを避けるためだと考えられる。これには、押しつけがましさを軽減したり強制することを回避したりする効果がある。本稿ではこれは相手への配慮を示すストラテジーであると捉えた。

本稿で論じた「ダ」の付加が配慮表現につながるという考え方を援用すると、近年耳にする機会のある「ありがとうだ」「よろしくだ」「きゃーだ」「わーいだ」のような表現についても説明が可能になると思われる。具体的な考察は今後となるが、これらは話し手の感情を表出する形式に「ダ」が後接している。発話時における直接的な表現を避けて配慮を表すという点で、本稿の考察対象と共通性を持っており、併せて見ていくことで配慮のあり方を探る手がかりになると考えられる。

【参考文献】

- 川瀬生郎 (1992) 「縮約表現と縮約形の文法」『東京大学留学生センター紀要』 2, pp.1-24
近藤安月子・小森和子編 (2012) 『日本語教育事典』 研究社
白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』 くろしお出版
新屋映子 (2015) 「新しいデス文—その実態と機能—」『日本語文法』 15(2), pp.65-81
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』 くろしお出版
藤井聖子 (2008) 「話しことばの談話データを用いた文法研究—日常会話で構文機能が強化する?—『～ないと』『～なきゃ』『～なくちゃ』の文法」長谷川寿一・C. ラマール・伊藤たかね編『こころと言葉—進化と認知科学のアプローチ—』 pp.129-149, 東京大学出版会
藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法—データの収集と分析—』 pp.43-72, ひつじ書房
前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』 くろしお出版
南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*. Oxford University Press [坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』 大修館書店]
Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universal in language usage*. Cambridge University Press [田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象—』 研究社]

【謝辞】

本稿は2021年9月25日に行われた「韓国日本文化学会第60回国際学術大会」で口頭発表した内容を基としている。貴重なご意見・ご指摘をくださった方へ心からお礼申し上げます。

